

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530419

研究課題名(和文) 19世紀後半20世紀前半ロシア・ソ連農村社会の人と家畜における疾病・医療・保険

研究課題名(英文) Diseases, medical care and insurance in rural Russia from the late 19th century until World War 2

研究代表者

崔 在東 (Choi, Jaedong)

慶應義塾大学・経済学部・准教授

研究者番号：10292856

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：帝政ロシアと革命後のソヴィエト・ロシアの農村社会における最大の問題の一つは梅毒であり、その感染率はおよそ40%であった。次に、1917年革命直後の戦時共産主義に発生した飢饉と人口の激減の背景にはスペイン・カゼの横行が存在していた。また、農民経営の保護のために導入された家畜保険は十分に機能せず、畜産はソヴィエト農業の発展に足かせとなった。最後に、ソヴィエト・ロシアの農村部においても革命前をはるかに上回る数の火事が発生し、その主な原因は過失と原因不明を含む放火であり、その割合は80%を超えていた。1920年代だけでなく集団化の1930年代全般にわたっても状況は変わらなかった。

研究成果の概要(英文)：One of the biggest problems in the peasant communities of Tsarist Russia and Soviet Union after the 1917 revolution was a very high syphilis infection rate. It was approximately 40%. The rampant Spain Flu broke out at the same time with the fatal famine and the dramatic decrease of population occurred during the War Communism immediately after the 1917 revolution. In addition, livestock insurance was introduced for the protection of peasant economy, but it did not function adequately. Livestock sector became a stumbling block in the development of Soviet agriculture. Moreover, a lot of fires took place in rural areas of the Soviet Union as in imperial Russia, and it outweigh far the number of fires in imperial Russia. The main cause was also arson, including blunders and unknown, that percentage is about 80%. The situation has not changed during the Collectivization in the 1930s.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：ロシア ソヴィエト・ロシア 疾病 防疫 梅毒 保険 家畜保険 ゼムストヴォ

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、ロシア・ソ連史研究においては新たな開拓分野であるが、以下の理由から注目するようになった。まず、各時代各地域に人々がどのような衣食住の環境で暮らしていたのかという衛生状況は当然ながら、人々の生き方や寿命などに多大な影響を与える。次に、どのような性意識や自己意識を持ち、性生活を営為していたかは、出産、人口と家族のあり方に重要な意味を有する。また、衛生状況や性生活は当然なら疾病に大きな意味を持つ。現在にも社会病や伝染病に人類は悩まされており、その対策としての衛生・医療・保険は国家の社会事業の大きな柱となっている。

(2) 人の労働力を中心としていた稲作地帯と違って、ヨーロッパ農村社会において家畜は食料としても農作業のためにも欠かせない存在である。とりわけ家畜がないというのは貧農と見なされ、家畜無しでは健全な経営の営みが期待できなかった。現在においても家畜は人類の欠かせない食糧であり、その意味はますます大きくなっている。しかし、様々な家畜の疾病は食糧だけでなくしばしば人間の健康を脅かすことにまで及んでいる。そのため、家畜の飼育だけでなく獣医・防疫と家畜保険などの対策が講じられている。19世紀後半から第二次世界大戦までのロシア・ソ連の農村社会と政府も全く同様な問題に直面していたが、これまでほとんど注目されず研究されてこなかった。

2. 研究の目的

(1) 本研究の対象時期である農奴解放からロシア革命、さらに社会主義体制下の集団化、第二次世界大戦までの時期についての従来の研究は、主として、土地利用・所有(共同体、集団化) 飢饉と穀物調達、政治的対立の実態を明らかにすることに集中してきた。すなわち、土地、労働、資本は一般的に生産3要素として経済分析の際に重要視されているが、研究史においてはその一つである土地だけに主に重点が置かれ、労働である「人」と資本である「家畜」とを取り巻く諸状況についてはほとんど研究されてこなかった。本研究は、新しい史料の発掘を通じて、19世紀後半から20世紀前半のロシア農村社会の新たな側面を掘り出すだけでなく、既存の研究史においてほとんど看過されてきた新しい時代像を提示することを期待できる。

(2) 従来の研究においては、主としてロシア社会主義革命を境に、実証研究が分断し、その継続性と断絶性の問題は十分に解明されてこなかった。本研究は、農奴解放(1861年)から第二次世界大戦の勃発直前

までのロシア史の中でももっと波乱に満ちたおよそ1世紀間の激動の時代における人と家畜とをめぐむ状況を農村社会と農民経営の「日常性」という観点から、従来帝政期農民研究の「ロシア革命への収斂」という畧から解放され、革命前後の連続性を体系的に究明できるという積極的かつ画期的意味を有する。

(3) 本研究は、農奴解放(1861年)からロシア社会主義革命(1917年)、さらに第二次世界大戦の勃発(1941年)に至るおよそ1世紀間におけるロシアおよびソ連の農村社会を、人の衛生、疾病、身体、医療と保険という観点から見直し、新たな社会および時代像を提示することを目的とする。衛生・栄養、疾病および飲酒などの生活環境は当然ながら身体構造や障害状況に大きな影響を及ぼす。その影響は肉体的側面だけでなく、精神的側面にも少なくない。これらの問題は、ロシアの従来の研究史においてこれらが注目されることはほとんどなかった。これを通じて、本研究は、土地利用・所有(共同体・集団化)、食糧調達・飢饉と政治的対立に重点が置かれてきた従来の研究を相対化し、農村社会および農民家族の「日常性」の新たな一断面を発掘することを目的とする。

(4) 本研究は、人だけでなく、農民経営の維持に欠かせない、また農業政策上においてもロシアおよびソ連政府によって最も重要視されていた家畜(馬・牛)も同時にその研究対象とし、飼育、疾病、獣医と防疫、家畜保険の観点から家畜を取り巻く状況を解明にすることを目的とする。家畜は農民経営のセーフティのために非常に重要であったため、政府も地方自治体も家畜の飼育や疾病および防疫にかなりの経費を注いでおり、とりわけ家畜の保険制度に関してはすでに19世紀後半から全国的に展開され、革命後にも継続していたが、この問題は従来の研究史では、十分に注目されてこなかった。

(5) 人と家畜との衛生・疾病・医療・保険などの諸問題は、他国でも普遍的に観察されるものであるものの、他国史においても十分に研究されていない。それだけに、本研究は比較史的視点からの新たな研究の地平の提示と広がりが期待できる。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、1861年農奴解放から1917年ロシア社会主義革命、1930年農業集団化、さらに1940年第二次世界大戦勃発直前までの間におけるロシア・ソ連の農村社会と農民政策を、人と家畜との疾病、医療および保険という観点から究明することを目的とするが、この問題は従来のロシア史研究においてはほとんど注目されてこなかった。本研究は、研究代表者

による単独遂行の研究であるが、既存の研究の蓄積がほとんど存在していないため、研究は主としてロシア現地の図書館と公文書館およびアメリカの図書館における一次資料の新たな発掘と収集を通じて遂行される。まず、ロシアのモスクワとペテルブルグへ渡航し、ロシアの国立諸図書館、ロシア中央および地域の諸歴史公文書館で関連史料を収集した。ロシア社会主義革命前の公文書は主にペテルブルグの中央公文書館と各地域公文書館に保管されており、ロシア革命後のソ連期に関しては主にモスクワの中央公文書館と各地域公文書館に保管されている。また革命前と革命後の農村社会に関する膨大な資料がアメリカの図書館にも保管されているため、これらも積極的に利用した。

(2) 一次公刊史料としては、内務省、国家財産省および農業省、財務省などのロシア中央政府の関連官庁によって公刊された帝政ロシア農村地域における人の疾病と医療・防疫報告書、家畜の疾病と防疫報告書、革命後については内務人民委員部、農業人民委員部、厚生人民委員部と国立保険庁などのソ連政府の関連官庁によって公刊された各種報告書が用いられる。革命前に関しては地方自治体であるゼムストヴォが設置されている帝政ロシアの 34 県における県ゼムストヴォと郡ゼムストヴォとの年次定例総会報告書、膨大な量に達する事業関連医師や獣医の現場活動および調査報告書、革命後のソ連期に関しては、各地方の州人民委員部、州厚生人民委員部、国立保険庁の分署の報告書および現場の医師や獣医の報告書が用いられる。中央と地方の新聞、雑誌、政府機関の機関誌および広報誌、ゼムストヴォ指導員および当時の社会・経済学者によって公刊される調査研究報告書などが用いられる。

(3) 公文書館に保管されている未公刊一次資料としては、ロシア革命前の帝政ロシア期中央政府の公文書と地方行政組織および自治組織の公文書、革命後のソ連政府の公文書と地方行政組織の公文書が用いられる。前者においては主にロシア全国レベルの状況、ロシア政府内部における政策作成過程における議論、そして中央政府関連官庁と地方とやり取り、各医療および防疫組織の活動、医師や獣医の活動と対応、農村住民の多様な対応などについての史料を収集できる。なお、地方の公文書館では、現地実務機関によって調査・作成される生のままのミクロ的史料が収集できる。ロシアの領土は広大で県の数としても 50 以上が数えられるため、本研究では主にモスクワ州とペテルブルグ州の地方公文書館の史料を用いる。利用する公文書館は、具体的には、ペテルブルグ市にあるロシア連邦国立歴史公文書館 (РГИА)、モスクワ市にある

ロシア連邦国家公文書館 (ГАРФ)、モスクワ市にあるロシア国立経済公文書館 (РГАЭ)、ペテルブルグ州国立歴史公文書館 (ЦГИА СПб) とペテルブルグ国立公文書館 (ЦГА СПб)、モスクワ州歴史公文書館 (ЦИАМ) とモスクワ市中央公文書館 (ЦАГМ) である。

4. 研究成果

(1) 帝政ロシアの農村社会には世界的にも類を見ないほど高い性病 (梅毒) の感染率を記録していた。全体的に成人の 40% 近くが梅毒などの性病にかかっていた。年齢分布で見ると、複数のアンケート調査によれば、10 代半ばで半数以上が性的経験を有し、性病の感染者はほとんど性的能力を旺盛に有する年齢層である 20 代から 40 代に集中していた。このことは、帝政ロシアの農村社会には自由な性生活と売春が広範囲にわたって存在していたことを意味する。ゼムストヴォ医療関係者と報告書は一貫して性的交渉によるのではなく、非衛生的な生活環境と遺伝などによる感染を強調していた。またもう一つの強力な根拠としてロシアの女性が過酷な労働に覆われ、栄養の面でも疲弊していたため、早い時期から性交渉に興味を失っていたことが強調されていた。しかしながら、梅毒は性的交渉以外による感染は極めてまれであることを考えるとその根拠は薄い。それに、ロシアの女性が性的能力に問題を有していたことを証明できる根拠はどこにも存在していない。逆に、多くの事例はロシア女性が旺盛な性的営みを有していたことを示している。問題はなぜゼムストヴォ医療関係者がこの事実を目をつぶっていたかである。その主な理由は彼らの大半がロシア農民と農村の中で新たな発展の第 3 の道を模索していたネオ・ナロドニキー (新人民主義者) に属し、農民社会の黒い絶望的な側面を認めることを先験的に困難であったからである。しかし、この梅毒感染の問題はロシア農村社会の最大な問題の一つとして認識されており、低い土地生産性と共にその後進性の主な原因であり続けていた。ゼムストヴォの財政支出のうち最も高い割合を占めていたのは医療関係であるが、その半分以上が性病の対策に費やされていた。これはロシアとソ連の農村社会が梅毒にどれだけ腐心していたのかを物語るものである。それにもかかわらず、帝政ロシア体制の崩壊までその感染率は低下していなかった。一方、ソ連の農村社会においても状況は、全く同様であった。依然として 40% 前後の高い感染率が報告されていた。西欧の様々な先進医療の導入や独自の処方の開発に取り組んでいた。ボルシェビキ政権も帝政ロシア政府と同様にロシア農村社会の最大の問題として梅毒問題を受け止めていた。ところで、1920 年代後半からボルシェビキ政権は新たな処方方法の独自開発による

梅毒の激減と退治を大々的に社会主義の勝利として宣伝していた。この時期はスターリン体制の成立の出発点となる第1次5ヶ年計画の急速な工業化と農業の集団化が開始する時期と一致する。この時期から疾病関連資料の公開が禁止されることになるため、公式データは確認できなくなる。しかし、非公開の秘密調査報告書によれば、梅毒の高い感染率は1920年代だけでなく、集団化の1930年代にかけても全く変わらず、地域によって上昇さえ見られた。

(2) 新経済政策ネップへの移行の直前にボルシェビキ政権とロシア農民は戦時共産主義と内戦という極めて困難な時期に直面していた。この時期についての従来の研究の焦点は大規模な飢饉と数百万にも上る死者の発生という人口の激減にあった。従来の研究は飢饉と人口激減の主な原因をボルシェビキ政権による極端な食糧調達政策だけに求めていた。ところが、1920年代初頭はヨーロッパだけでなく中国や日本までにいわゆるスペイン・カゼが横行し、膨大な人口激減を経験しただけに、ロシアも例外ではなかった。実際にヨーロッパ全土でスペイン・カゼがピークに達していた1920年と1921年とにソヴィエト・ロシアにおけるカゼによる死者が数百万を記録した。それまではわずか1万人前後であったに過ぎなかった。飢饉とスペイン・カゼは双方の破壊力を拍車をかけ、エスカレートする模様となった。新生のボルシェビキ政権はその対策に手を焼いていたものの、成果を上げることは極めて困難であった。したがって、1920年代初頭ソヴィエトにおける飢饉と人口激減の主な理由はスペイン・カゼであり、それがネップへの政策転換をボルシェビキに余儀なくした。

(3) 1861年農奴解放直後地方自治体(ゼムストヴォ)の発足と同時に、ロシア政府は貴族や国家の後見から解放される農民経営のセーフティのために様々な施策を講じたが、その中でも重要な意味を有していたものの一つが、医療と防疫事業、そして保険制度の構築であった。地方自治体ゼムストヴォの支出の中でも医療と衛生関連が最も高い比重を占めていただけでなく、その金額は19世紀末から1917年帝政ロシア政府の崩壊までのわずか20年の間におよそ10倍以上跳ね上がっていた。それに従って、医療や衛生・防疫関連組織のネットワークはロシア農村社会に急速に拡大していた。それとともに、生命保険と医療保険は任意保険であり、民間の営利保険会社に任されていたものの、ロシア農民の加入率は持続的に増加していた。その結果、帝政ロシア末期のロシア農村社会における医療・衛生条件は大きく改善され、死亡率や疾病率において大きな低下がもたらされた。一方、1917年ロシア社会革命後のポリシェビキ・ソヴィエト政権も第一次世界大戦やロシア革命さらに内戦と戦時共産主義を経て大きく低下していた農村社会の医療・衛

生条件の改善とネットワークの復元と拡大に大きな力を注いだ。とりわけ1920年代のネップ期において医療予算の拡大とネットワークの再建と拡大が見られたが、1929年から始まるスターリン体制の強化と急速な工業化および農業の集団化は、農村部における死亡率の増大を医療・衛生条件の悪化をもたらした。

(4) 農民経済の保護のために実験的に実施された家畜保険は、革命までの場合にはフランスなどのヨーロッパ諸国の経験を見習い、家畜保険制度がいくつかの先進的な梟ゼムストヴォによって実験的に導入が試みられることにとどまり、全国的なまたは政府レベルでの取り組みは見られなかった。家畜保険の大半は火災保険とは異なり、閉塞状況に陥っていた。その主な理由はその対象が農民だけであったこと、農民経営の保有家畜数が1頭ないし2頭に過ぎなかったこと、強制加入が義務付けられていた火災保険とは異なり、任意加入であったため、農民の加入率が極めて低かったこと、しばしば保険金目当ての偽りの対応が頻繁に見かけられたこと、さらに家畜保険事業が赤字に陥っていたことなどであった。ロシア革命後のポリシェビキ政府は帝政ロシアとは異なり、家畜保険も火災保険と同様に強制保険として導入し、全農民に加入を義務付けた。全体的な運営状況としては革命前とは大きく異なることはなく、混乱を極めていた。というのも革命前における事業不振の原因が同様に革命後にも受け継がれているからであった。この問題は集団化以降においても基本的には続き、畜産と酪農の不振というソ連農業の発展を妨げる構造的な問題となっていた。

(5) 医療保険、生命保険と家畜保険の他にボルシェビキ政権は農民経営の保護と発展を目的として国家火災保険をネップへの転換の年である1923年秋に導入した。帝政ロシア政府とゼムストヴォの経験を受け継ぐものであった。国家火災保険の発足の同時に、第一次世界大戦と1917年ロシア革命期に抑えられていた火事発生件数が再び上昇を示した。ソヴィエト・ロシアの農村社会には再び帝政ロシア期と全く同様に膨大な数の火事が発生し、その数は帝政ロシアのピーク期である1909年と1910年におけるそれをはるかに超える規模に膨れ上がった。火事の原因の面においても帝政ロシア期とほとんど同様の分布を示し、過失と原因不明を含む放火の割合は80%を超えていた。集団化と工業化の開始期からボルシェビキ政権はネップ期におけるそれまでの対応から一転し、農村部の不遜分子による破壊行為の結果であると見解を示し、大々的なキャンペーンを展開した。しかしながら、非公開の秘密報告書によれば、火事発生原因の主な原因は非階級的な性格のもので、ボルシェビキが宣伝する階級闘争的・放

火は極めてわずかしかなかった。それに、農村部における火事発生件数は、集団化を経験する1930年代全般にも変わらず、1920年代と全く同様に膨大な数を記録していた。

目下、各々の問題について学会誌への投稿論文を執筆中である。その他、下記の論文を英文学会誌に投稿中である。

Jaedong Choi, Fire, arson and fire insurance in rural Russia circa 1900, *Slavonic and Eastern European Review*, 2014.

Jaedong Choi, Grass-sowing, agricultural assistance and peasant dairy cooperatives in rural Russia circa 1900, *Russian Review*, 2014.

さらに、下記の論文を英文学会誌への投稿を準備中である。

Jaedong Choi, Peasant private & common ownership and family division during the Stolypin agrarian reform in Russia.

Jaedong Choi, Peasant will and inheritance during the Stolypin agrarian reform in Russia.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

崔在東、20世紀初頭ロシアにおけるゼムストヴォ課税と商工業、三田学会雑誌、査読無、第105巻2号、2012年、35-90頁。

崔在東、20世紀初頭ロシア農村社会におけるゼムストヴォ防災事業、20世紀ロシアの農民世界(野部公一・崔在東編)、査読無、2012年、35-66頁。

崔在東、20世紀初頭ロシアの農村・農民・農業、ロシア史研究案内、査読無、2012年、99-111頁。

Джаедонг Чой, Земские противопожарные мероприятия в сельской России начала 20 века: Распланирование селений, сельские пожарные дружины, огнестойкое строительство, огнегасительные инструменты, детские ясли, обсадка селений деревьями, *XX век и сельская Россия. Вып. 2*, 2012, С. 65-109.

崔在東、近代ロシア農村社会におけるゼムストヴォ火災保険(1850-1918): モスクワ県を中心として、三田学会雑誌、査読無、第104巻1号、2011年、63-98頁。

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 1 件)

崔在東 他、20世紀ロシアの農民世界、日本経済評論社、2012年

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

崔在東 (CHOI, Jaedong)

慶應義塾大学・経済学部・准教授
研究者番号: 10292856

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: